



排譜たわさる

今や俳諧と銘ふ事

と云ふは浦安の裏番戸

こそ自身土手かゝる雪子

の京物さし合ふの掟目

先かそつみ兼まつり松門亭

昔求年比あはれと云や

一と故實と云うら池

遠くは河内筑前と云新

たにさくく花も茶も草も

是れを名とて俳神

あつひゆんゆんゆん

是れも本町割と云ふ

三二 題号 せよとこみよ
考くは其品名成りしに
字みかこ自やうし是也
別といふの種袋あるん
うく戯きふ動は巻と係
板元猫杖童の伝書
道と夏志の初

洪北

和墨庵

宋屋

吉

叙

凡俳諧初人のみしりし書
往くは有るくくくくは其地を
ての説而色みくくくは其
ままとあつた物なり其
あまの俳諧の流とくくくは
たつとあま一今此書の連俳
の起り并 面八分の古実口訣を
あつたくくくくくは其後
ままといふ是と記しゆくく
後人よあまくくくは其の
諸抄ありくくくは其の
ままといふ多々の先師の集り
是と補ふを中の中は公事年
中行ままの中註ありては初
のあまといふ物粗きしを有
ままといふくくくは其物書

傳りぬ竹本鳥獸名の目名
あつくりく書加つて且巻末
ふりりく数字の説字去りの
説りく近年誤り来物と新式
秘註御筆の口訣并所説を
考合く初人の人よ志り
ひりり

自徳正傳三世時實人
宝曆戊寅季夏言 雪莎坊書

俳諧之目錄

四季之詞 草木鳥獸之異名
自正月至十二月

一 非季之辞

一 七十二候 一月六候其記時候

一 聯歌俳諧之古實

并和漢式大意

一 連歌俳諧之差別

一 俳諧式十首之歌 長頭凡

并十徳

一 面八句之事 并秘説

癸卯仕振り文
服りくし海并須多り服り

子三々々并名爲の況
并少々々の夏

四の目々々并四の目方々
の説

五の目六の目七の目八の目
の夏

二面々々心増并面々増々詞

并九の目裏移のり
十の目々

一連歌俳諧两用之詞

一數字々説并字去々説

一附句々用捨

一俳諧之式

俳諧を子々々他 四季之詞

春 蒼美 青帝 青陽 陽春 東君
春王 韶光 嘉節 嘉辰 芳春

正月 上陽 孟春 夏正 初陽
覆新 新春 早春 聖節

端月 臘月 睦月 初正月 初元月
辰初月 初正月 辰月 乙未月

立春 元日 元朔 元二 鷄旦
歲且 年始 年頭 三元

鷄旦 上日 三朔 今年 年の去
二始 改且 初日

四方の去々々三あ々々の去 初
年 初年 月の始 三の始

四方拜 星々 若水 けみ井
ひく

おさうり 若急ひと 初鶉

初夏 八孫 挙 八孫 つじ

門 杵 竹 鏡餅 齒圓

蓬菜 傍 齒 菜 白 菜

胡蝶 胡蝶小物 院の形孔 元日名表 伝有表

年法 海方門の林柳 かけ朝

大づね後人 雜煮後人 大

かみま 芋ぐら フトバシ ち箸 ち箸

たのまひ 串あひ 友のめ 年

玉玉抄 練打 ちこ板 ち餅

ちこ板 ちこ板

物曆 さそり ちこ板

物曆 さそり ちこ板

物曆 さそり ちこ板

店卸 物高 宝了 水鏡

物高 宝了 水鏡

物高 宝了 水鏡

想文 縁物 三物 連秋 俳諧

裏白 縁物 三物 連秋 俳諧

霞 縁物の海 縁物の網 白玉

山笑 山慶 春の文 永日

猿雪 去の雪 台紙 名汁 氷

冬 冬

子日遊 子日の表 卯杖 卯杖 七種 人日

白馬 白馬

夕 夕

田角打 田角打

爆竹 爆竹

爆竹 爆竹

爆竹 爆竹

去形保記 二月

堂の 萩 蕨 薪の 能

遺教 経 会 涅槃 会 云

二月 嵯峨 柱 彼岸 時正

社日 社 治 藤 酒 紙 考 名 花 棠

は 尾 の 考 柳 子

さ と 聞 と 考 雉 子

石 燕 白 燕 歸 丁 雲 雀

ひ り 白 考 雀 の 子

百 多 考 松 考 考 鶯 考

馬 考 考 果 考 考 考

鳥 遊 北 猫 の 妻 乞 蝶 翅 云

蜂 山 蜂 似 我 考 蛇 蛙 考 子

地 虫 考 魚 考

物 餅 考 蛭 考 蛭 考

寄 居 虫 考 飯 蛸 考 蛸 鮒

油 女 紅 梅 考 接 木 木

の 芽 葉 花 と 考 物 花 考

橋 考 考 考 考 考

下 萌 若 紫 角 組 芦 種

考 考 藍 考 蓮 考 考 菜

の 考 考 考 考 考

考 考 松 菜 苜 考 考 考

春萩 葛荷竹 二葉竹

碎赤菜 蓮さくろ 木苺

夏と約らぬ 苦春 三月

其の漆 ゆく其の漆 其の漆

夏 朱明 朱夏 三夏 九夏 朱律 盛夏 昊天 光節

四月 正陽 孟夏 余月 陰月 乾月 清和 中呂 卯月

卯の花月 花月

衣入 更衣 白く給 給給 青々

氷の貢 虎杖紐 神祭 神祭

法衣 袈裟 籠手 山王 山科 梅衣 曾の形 八束 多知 桑野 吉田 一衣 當十 大伴 杜本 大木 松尾 磯城 法衣地 日光 山崎 瑞宗 瑞生 あい 磯城 中山 大津 右泰 新日吉

佛生日 催仏 浴仏 湯 結衣

衣入 衣衣 當十 踏供養

子園子 矢數 鮎 雀

はるばる 蚊帳 蚊 蚊帳

藤系雀 雀 時鳥 雀

あき鳥 土田鳥 不知鳥 くら鳥

玉連鳥 五羽鳥 たまご鳥 いりせ鳥

あつ鳥 うつた鳥 さくめ鳥 めり鳥

童子鳥 百舌鳥 夜鳥 くささ

鶯鳥 鶯鳥 雀 雀

鹿ノ袋角 子子 蝶填

蜘蛛の子 飛蚊 鮎 石魚

鳶賊 生鯉 新樹 新樹

餘花 新楓 新紫 抽花

卯の花 卯の花 卯の花 卯の花

金柑花 金柑花 柿の花 柿の花 とうりの

花 花 栗の花 栗の花 櫻の花 櫻の花 厚朴

牡丹 牡丹 白丁花 白丁花 梅

の葉 の葉 牡丹 牡丹 牡丹 牡丹

茶 茶 杜若 杜若 杜若 杜若

あひ あひ 葵 葵 葵 葵

薔薇 薔薇 芍薬 芍薬 芍薬 芍薬

栗花 栗花 白木花 白木花 宝澤花 宝澤花

車花 車花 長生花 長生花 岩菘 岩菘 文

字花 字花 茶花 茶花 苔花 苔花

玉菖 玉菖 玉菖 玉菖 芭蕉 芭蕉 蓼

利根 利根 芍菜 芍菜 蓮 蓮 蓮 蓮

都州 都州 王 王 後 後 子 子 木

夏本 夏本 立 立

五月 五月 仲夏 仲夏 五月 五月 梅月 梅月 早月 早月

五月 五月 早月 早月 吹花月 吹花月 田月 田月

暑月 暑月 朝月 朝月

五月 五月 梅月 梅月 加茂 加茂 足 足 花

菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲

茶玉 茶玉 茶玉 茶玉 茶玉 茶玉

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶 茶 茶 茶 茶 茶

その鏡 神水 平地 辰

の表糸 字法、今更 山田 田植

住吉 田植 有 毎日 大 子

志 夏至 塚 離 紙 園

池 築 洗 蚊 蚊より 築 打 鴉

川 うねい 鴉 か 蛭 鮎 鮎 水 雞

獸 狩 夜 螢 いんま 蝸 牛

子 蠅 子 鹿 子 水 魚 巢

羽 按 多 蛇 ぬ 脱 田 植

早 早く 子 子 女 女 田 田 早 早 桃 桃 梨 梨 過

花 栗 子 花 櫻 雲見 合 枝

の 花 松 櫛 子 南 天 子 花

色 子 子 花 柳 子 花 吳 陽 柳

青 梅 梅 花 早 桃 梨

楊 梅 青 山 椒 生 胡 桃

覆 盆 子 天 蓼 百 合

車 子 ひめ 真 菰 刈

子 不 草 水 子 花 藤 子

和 布 刈 青 番 椒 茨 花

子 子 子 花 紫 陽 花 子

浮 查 子 下 母 子 花 紅 子

萱 州 子 花 金 瓶 子

忍 冬 夏 菊 胡 蝶 子 蚊 帳 子

羊 蹄 子 酢 將 子 花 地 床 子

子 子 子 子 子 子 子 子

杜鵑花ツツキ 夕日紅草スサキ

蠶菘カキ 苜蓿ヒヨコ 薑粟シロ 粟時ムギ

於麻マ 及大根ダイコン 荊胡カサネ 早此サキ

白丸シロ 黄鐘調ワウキョウテウ

六月ロクゲツ 季夏林鐘 季月 涼暑月

松風月

冰室ヒヤム 氷室の雪 氷室の雪 暑日ナツヒ

納涼ナツシヤウ 風カゼ 涼シヤウ 月ツキ

雲の峯クモノミネ 丹波タニハ 夕立ユキダレ

土用干ツチヨウカン 泉殿イハヒ 湯ユ

新井ニイ 日傘ヒカサ 清スガ 水ミヅ

水飯ミヅイ 葛水カヅミ 干飯カンイ

煮冷ニヒヤシ 及切糸キリイト 醃酒ウケサケ 一夜酒イチヤサケ

及瘦キレガ 扇アヒ 風カゼ 扇アヒ

團扇ウツクシ 抱箆アヒ 竹夫人タケウタ 脚タビ

祇園キヨ 天鼓テンコ 座ザ

須の涼スノシヤウ 及士指ウチササ 市イチ 住ジ 後ノチ

鞍馬竹切アサマタケキリ 及宅子ウチノコ 指ササ 唐カラ

雅城ヤシロ 及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ

川社カハヂヤ 及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ

邪神ヤカミ 川カハ 及後ノチ 及後ノチ

物モノ 及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ

及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ

及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ 及後ノチ

虫 蛭 蠅 虻 蠍 百日紅 百日紅

楮 楮子 林檎 常盤木 常盤木

梅子 大和梅子 唐梅子 不行情 不行情

蓮 池見 蓮 河骨 河骨 菱 菱

蒲 蒲 日白葵 日白葵 荒 荒

和布 和布 海松 海松 松 松 時 時

討草 討草 蒲刈 蒲刈 凌宵 凌宵 花 花

鴉子 鴉子 眼皮 眼皮 鉄緑 鉄緑 花 花 鹿 鹿

鹿 鹿 釣糸 釣糸 風葉 風葉 鹿 鹿

夕 夕 麻 麻 紫 紫 綿 綿

鬼灯 鬼灯 射干 射干 紫 紫 綿 綿

の 花 茗荷 葛 葛 の 花 南 南 瓜 瓜

瓜 瓜 茄子 茄子

瓢箪 瓢箪 草 草

香薷 香薷 薏苡仁 薏苡仁

木耳 木耳 柿 柿 洗 洗 石 石

水 毎月の 純

秋 白藏 白帝 三秋 西皓

七月 孟秋 夷則 文月 七夕月 相月 開秋 桐秋 七夜月

涼月 涼月 夕月 夕月

立秋 秋の始 物 涼 山粧 病

物 風 冷 凜 冷 凜 鬼 火 出 暑 出 暑

露 露 霽 霽

胸の芳き香 **箱妻** 箱の妻 **七日**

のまの七夕 星のまの 二星

星の契り天の川鶴の足 五羽の足

とつら舟二星を放幸牛織女

疾星男七夕女七夕七夕娘 甚難

さかまひめ 物ふみめ 秋さら衣握の原

庭の古契 七筒池 **干柴盆**

乞巧天 穿針橋 **六の糸** 遠心子 **生化魂** さう緒

中元 **霊祭** 聖具 **施火**

大文字火 **炮** 揚炮竜 **踊** い

妙法火 **踊** い

小町どり 組踊 **山田** **衝突** 入

地務 **接待** **逆の峯** **入**

相撲 小より供 **射山** かや

物多狩 小意狩 **鳩吹** **虫**

虫多し 虫より **時** **壺** 壺山

虫あり 虫籠 **贈** **沙魚** **扇**

壺 **新木** **新綿**

一系 **椒** **櫻** **花**

唐桐の花 **蜀漆の花** **本槿**

萩 萩の下を 庭見

萩 古萩 **萩** 萩の上

萩 萩の戸 **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

萩 萩を **萩** 萩を

湯風呂 居風呂 汗 氷水
 草羽 紗 経帷子 紙帳 紙布
 紙絹 葛布 芭蕉布 糸掛 足
 襪 足 踏皮 暖帳 毛氈 帛
 水 药 蒟 氷 砂糖 玄 岩 粽 赤
 蓮肉 短日 日待 村 氷 降
 の 風 胸 月 以 雪
 眉 糸 月 障 巾 旅 巾 巾
 踊 念 佛 母 子 け 赤 袴 求 子
 簾 誼 訪 糸 加 糸 ち 扇
 未 廣 中 啓 軍 配 團 扇 霞 金
 團 炭 顔 の 紅 糸 どん ぐら 眼
 松 極 龜 筋 子 齒 瓜 抜 糸
 韭 髮 推 仇 夕 顔 の上
 空 蟬 の 君 落 糸 糸 布 糸 糸
 紙 布 呂 糸 糸 糸 糸 糸 糸
 振 の 糸 糸 穀 搗 糸 糸
 志 笠 糸 糸 糸 糸 糸 糸
 十二 支 糸 糸 糸 糸 糸 糸
 櫻 谷 糸 糸 糸 糸 糸 糸

十九

七十二候
 七十一候
 七十二候

七十二候

東風解凍 麩 蟻 蟲 始 振 韻
 魚上氷 正 月 獺 糸 魚 韻
 鴻雁球 正 月 草 木 萌 動 韻
 桃始華 正 月 倉 庚 鳴 韻
 鷹化鳥鳩 正 月 玄 鳥 至 韻
 雷乃發聲 正 月 始 電 韻
 桐始華 正 月 田 鼠 化 鴛 韻
 虹始見 正 月 萍 始 生 韻
 鳴鳩拂羽 正 月 戴 勝 降 來 韻
 蟪蛄鳴 正 月 蚯 蚓 出 韻
 玉瓜生 正 月 苦 菜 秀 韻
 靡草死 正 月 交 秋 至 韻

四月廿九日 四月廿九日

蟻始生	鵲始鳴	蟬始鳴	温風至	鷹乃學習	土潤溽暑	涼風至	寒蟬鳴	天地始肅	鴻雁來	群鳥養羞	蟄蟲坏戶	鴻雁來賓	菊有黃華	草木黃落	水始冰	雉始雊	天氣上騰地氣下降
萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌
六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月

鵲鳴不鳴	荔挺出	麋角解	鷹北翔	雉始雊	征鳥厲疾	虎始交	蚯蚓出	水泉動	雀始巢	雉始乳	水澤腹堅
萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌	萌
六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月

右七十二候の書しと有る
 候の時候と云ふは
 子附白と用ひるは多し
 りせの前後とありあり
 今も時候と云ふは物
 人の便と云ふ也

連歌俳諧之古矣

八雲御抄云連歌むしん五
 約百約と云ふは
 上のりく下のりく

治式よりある所ありあつたる形
式より依て建治式と云ふ式より
を根奉式の心建治二年より至享
安五年二十七年
そのら又法常因ち園白兼良公
一条禪園建治二年より至享
安五年二十七年の宗通宗砌より相
法ありて享治九年 法花園守 書
加ふるとして新式遊加と云ふ
五年より至享治
五年二十七年けり和浄の式もか
ありて法肖相 後柏系帝の
勅とけて道遥院殿に相法あ
つて文龜元年 日守 一書加らん
一と新式今案より享治元年より
至文龜元年
辨と當代所用之連式目之
俳諧い衰安の新式とありて
自徳翁清傘の式と定りて
新式一座一白の物に二白と二
白の物に三白と一七白の物を
白と定めたるは又和浄の式

同式新式清傘の自序とて安
の新式とて一座一白の物に二
白不定七白の物と云ふはあやう
のく而已りて私の新法と一と
いふと誰とありたり和浄の
く相とていふものくは以上師説
又けり傘よりぬおは俳式の趣
十首の歌よつと稱まひて浪谷氏
示しとる一歌ありたり記
御傘執柄抄其説翁
述作曰け書自徳
翁草稿ありとていふと賢と
あひるるといふ編をいふ校合
を毎く打捨ありとて自徳
去兼應二年癸巳のく一と云
以後又草稿の終りて用板せ
そのく故よけ書問より所より
と記し又ハ文字の落脱重復
けん得と云ふは傘と見ふ

たまに正説の師家の口訣と得て
歎く云々或は本食真山上人
の編まざる連歌無言抄と云物
の異説多く誤り同信有る所
傘に無言抄の非説と考ふるを
さへく凡百二十ヶ條信ふ之を
とく彼上人と自注翁と同
くさるる有るをさへくわの
子細と云くさへくわの者あり
且つ中約ふと粗のせり去り客
て文段は嗔と云くさへく甚だ見
みれば書やあつてさへくわ
ど信と云くさへく凡先書の誤と正
とらるの迷を解と云くさへくを
私ありんや何ぞ不和くさへく子細あり
らんやさへくさへく書ありと云く
眼の付所のありと云くさへく

以師説

聯歌和漢式 大少

後常恩寺園白壁茶種園也事
法今案和漢篇曰景物草木亦
負數和漢可通用事但而嵐昔
古曉老等類和漢各可用之
一四季可隔七句同字非悉迷懐亦
可隔五句曰連歌式自余隔七句之
物可隔五句隔五句之物可隔
三句隔三句之物可隔二句聯歌
類物曰是秋式目
一山類水且居所亦不可有法用
分別る也上師説抄云右云負數
和漢可通用さへく二ツの物と云
み二ツ清さへく二ツの物又曰裏
有るさへく物ハか務成一説云
二物と漢の言は異名ありさへく
今一有る名はの言は不可依る

一四

一四

不貴文高位 不親為知音
 不戀思愛別 不老知古今
 不行見名所 不節遊花月
 不移宜四季 不捨道憂世
 古十法の初は雅人の作と不知
 一説云山門一喜院の致師ハ園菴
 と好く風雅の志あり 宗師は師
 老ふを歎と云ふは多しと用
 ひふふと曰風雅の乃只推致の
 両ふふゆり而已何ぞ園菴の
 塔の法ありんや 然る宗師は十
 法と書記してまゝん致たる感
 一ふひくそれより連致と字
 ひく終は云々のまゝありふ
 七賢の一人
 致は古今を徹のみとこのひん
 はは〜みそふづ〜ふ
 こそ

面八のさき 并秘説

一発白く仕振く
 連致二致抄秘法云後白くは一
 さまの所々不遠は多し月雪
 こそ〜と致書の法と〜とけ
 能く爲るを〜と〜と如く相と
 観て春秋の移ゆ〜と月乃移ま
 と悲し風楯比真雅頌の六義と云
 べ〜と云く俳諧又けはとを源
 して作意の所有平の難況俚言
 とと捨ざして用いべ
 宮川氏口訣云夫發白は天下を
 らて陽をそよ切字と解して一
 白の文とあり〜と天の法の時
 あり〜と入て一白の衣を〜と
 と〜と可思と云く惣して發白
 切字と入るは白の〜と〜と

あぐの程さ苗みく一白も程は
いささかきさの中人あり物の名又
ハ字苗よといふこといふれも一白
の附あさ程くく仕立あひひ
たふも髪とひく艶髪とはあ
ぐれあぐもいふゆへ四白目
つとふとぞ

師説云宮川氏口訣云四白目の程く
と仕立といふ要は程ととまはる
より一巻のさなとみだりとも
のどが至極のふひあぐり四白目
ぶりよのけしりの字口傳あぐてハ
去あぐりぐり一なる方ハ張の字ふ
どんあぐりさるあぐり一と
あぐていけるさるぐり四白目ふ
アとの人名目とあぐて子細は
とてて面の八白目より以下別
てあぐりさる程くいささかあぐり

六白目より八白目よりいふと
あぐりるも髪さく艶髪とはあ
ととよりと四白目の一曲さ
あぐり程くをさる程の法抄
なごあを四白目ハ白目外ハ未座
あぐり位ひさる人を又ハ初人の
後く一假令まき功者かの人とい
ととと兼相よ程くさぐりとい
つとあぐり一とて表ハる人
の面のでく一眼耳鼻口の重所
正しく柔あぐりさる一とさ
とゆきとさるぐりさる醜^{ミシク}顔とあ
ぐり一とさる程と兼相よ程
くせとさる程と

一五白目くさ
師説云こてあぐりさるさるこて
苗あぐりさる目と程字あぐり
とさるさるこて程あぐりさる

て苗にあたり、惣て苗らん
苗らの一様なり、尚ほ之は中
くのべり、七の目より、
べり、七の目より、
作とを、
物之可、

一六の目の事

別の子細あり、たゞ、
指し、

一七の目の事

は所ま、
下月の定座、
毎指、
ま、
八の目の事

別の子細あり、
別の子細あり、
別の子細あり、

多しを、
多しを、

名所、
名所、

本懐、
本懐、

ま、
寝、
用、

一面八の目の事

右、
三、
如、
七、
一、

連、
ま、
五、
五、
目、

目、
目、
目、
目、
目、

何と附くと不苦只言がさる
白丸目ふしきく或は悪は
毎きふと本懐やと引くやん
付境よりく初へく化さるけ
裏接のの普く人の法はせぬ
と只裏とさく何と付ても
不苦くかやあら而もさふ
さくべし情のまぶ別るは
びべし十白目よりへはやくも
ひめしを連能のより目と又
十まのふみあり

一裏ふい五ま十まとのふる
あふべし五まの六白目より
とはまきと十白目より一切
神砂あふべし十白目のた
うらねん然どもまるれは
引上或は他巻の取をあま
物るたの貴人上客のいよめ

あまは作者の不れんやう
と際あまのふしきく作意
へる変り化の術あふべし
化かへ各別ん物も独りか
化付層かへはまよゆ物あ
あまの振よりまか百韻の
背でまは只控振のうら
がうれん保本乃の格式と
白勝とるの鬼と鏡持

一揚ふたれ又名目のひら
符一格あり他の白ふは
作況云揚ふのあまの
勿備あまの同類あまの
紋とるの用あり

宮内氏口訣云の符押
ふ敷し時へ巻袖の
そ中とひら平白に
あまのあまのあまの

容易の句にあらばをさしと
撰ぶる也と云く 昨説云揚
句惟と指當あらばいさく物と
ふらんよ月入波しるの指合と云
二二句と雲し垂てたては
元の句も本で附ふ十句あり
とを速ふ句と物と云くしる
在懐りたる句ありくしる
しは風情ありあそびと云く
和歌の組類を四季意雜後と
組て巻袖ふりあそびの歌あり
連俳一卷の首尾を色に河さか
右よ揚句の後の歌ありと云
てくしる以上所説

連俳两用之詞

一説云物と声と讀字の皆俳諧之
と云くしる後ありと云くしる

例 俳師 士 優婆塞 梵
類 好 意 宿世 縁
火 関 柳 律 堂 揚 地 儿 帳
蝶 菊 蘭 悉 琵琶 芭蕉
衛士 傭良 無礼 脱息 海物
屏風 蔭子 團扇 気色 草子

右は歌子と声と用のけ外に
あり

數字之古文

近年々紙の書云物も數字の死
らひやうと文字の書ふくと訓
ふくと七の去りて二より十まで
面と云ふ百千万の折と云ふ
と云ふべしと云くしる
人多しと云ふ筆ふと云ふ格式

長六八也但唐新式新式六附を居よ
四の物とて止奈利と折上二
はくくしとけお字を記すと
字去りおせりを年を記すと
ふまの多し程又数字が二
仙法と地ふれ録もあつて
より程委へ新式とせんくゆじ
べ

右数字非字去りの記りの小初
心の後どの書ふおとせども都
初とてゆぐとあべ一右と今
師説と卷ま一二と定記而已

附白く用捨并八條

連致一八條十六條廿四條平
八條八十條あつて附白の括る
能譜はけ八條と所要とと所謂
平八條八十條もけ八條とらけ

たる物他とて八字のまへへ平付
四の付凡付付付付あり又云流
ん付ねる付付付あり又云流

随放 逆の四とあつてあり
他あつて八書あつてくつて
知ろとのふりあり用虚其の
んゆあり又右風ふれあり付
いよとあつたふハキとつて
瘡と付唐土とのふり服指あ
ふあり付るんを中に用ひの
附る事一とんゆ

當世付るの層とぬとのをある
の付へくお捨とて西をけとま
るあつ物んの人多くへ用ひ
のふく本を年平初の書はま
んて付る兼載の書云物も付
あつてハ下とのふり及甲よ
と程の人をあると捨とて西と
捨とて付るんを互用の骨

ねん候令ハ謎トイフものニ笛ハ
 つて吹敷と云くおあつて鬼
 こそゆりしやまのこころあ
 へんそふりてのけ謎と始
 と解之ららんていふと上
 さきばかりのちとをこれ
 してそれいふとあつていふと皆
 用いたぬとていふと不持して
 こつてあつていふとけつてい
 後ハいふとていふと一もいふ
 ちてあつていふとけつてい
 んていふと一もいふとあつてい
 字はとていふとていふとてい

俳諧百韻之式

面八句 七月目月 定座 裏十句 八月目ヨリ 月替
 二面十句 十月目 月替 二裏十句 十一月目 初ウエ月
 三面十句 二月目 月替 三裏十句 三月目 初ウエ月

余波單句 三月目 余波裏句 七月目花定 坐ヨク花 花一日

七十二候之式

面八句 七月目月 定座 裏十句 八月目ヨリ 月替
 二面十句 十月目 月替 二裏十句 十一月目 初ウエ月
 余波單句 三月目 余波裏句 七月目花定 坐ヨク花 花一日

源氏之韻式

面八句 七月目月 定座 裏十句 八月目ヨリ 月替
 二面十句 十月目 月替 二裏十句 十一月目 初ウエ月
 余波單句 三月目 余波裏句 七月目花定 坐ヨク花 花一日

世吉之式

面八句 七月目月 定座 裏十句 八月目ヨリ 月替
 余波單句 三月目 余波裏句 七月目花定 坐ヨク花 花一日

秋仙之式

